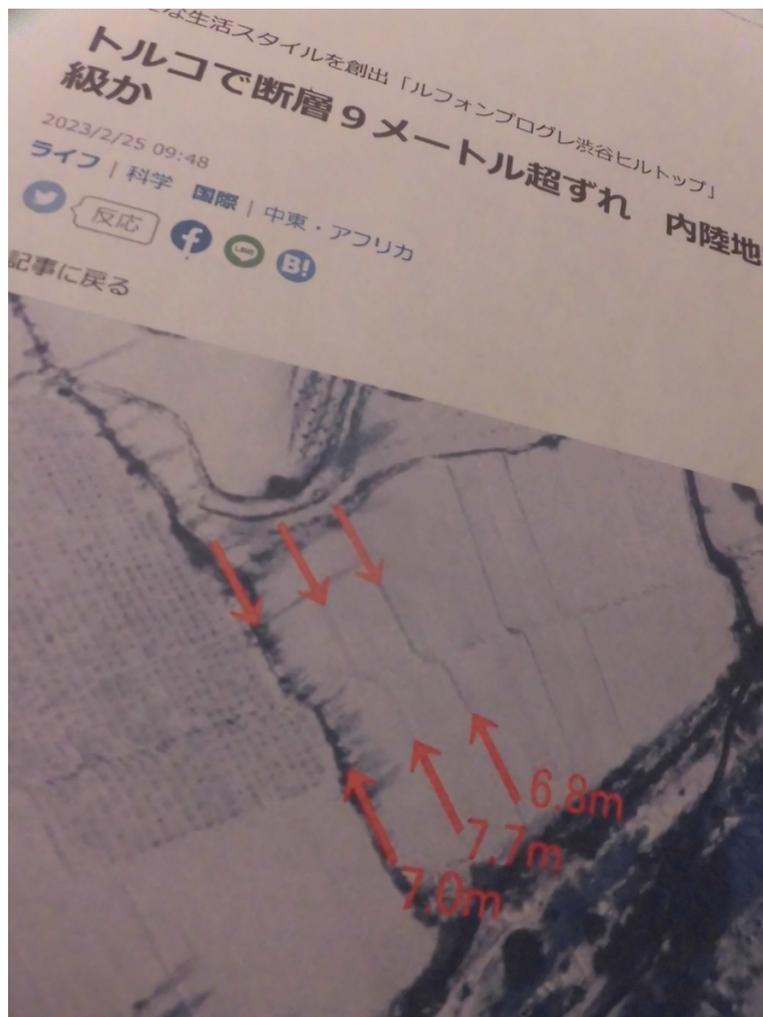


第91回 ただの地震じゃない？

IT生

トルコでまた地震が起きた。だいたいトルコや中南米で地震が起き、家屋が倒壊すると、日本より建物の耐震性が低いだの、建設業者と政治家の癒着で違法建築が横行しているだのといった、どこかよその国の話になりがちだった。

しかし、今回のトルコの地震でも当初、前述したようなありきたりの指摘がなされたが、9メートルに及ぶ断層のずれが現出するなど地震の詳細がわかるにつれて、日本の地震学者が騒ぎ出している。今回、トルコでM7.8、M7.5と立て続けに大きな地震がおきたのは熊本地震と似ているという主張から始まって、あげくは明治時代の濃尾地震、はては、安土桃山時代の慶長伏見地震まで話は遡りつつある。



次第に明らかになりつつあるトルコ地震。各地で7～最大9メートルともいわれる断層のずれが判明した

濃尾地震といえば、岐阜県を震源とし、内陸地震としては最大級といわれるマグニチュード8を記録した地震。慶長伏見地震にいたっては、その1週間の間に相次いで起きた九州から近畿にまたがる中央構造線の地震から始まり、玉突き状態で、有馬高槻、六甲淡路島断層の地震を引き起こした。さらに、阪神大震災はこの時の余震だともいわれている。

地震研究者が懸念しているのは、近年南海トラフ地震や首都直下地震の被害想定が相次いで引き下げられている状況などから、あたかも耐震化が進んでいるかのように思い込み、活断層の恐さが理解されていないのではないのか、ということだろう。高層ビルが乱立し交通インフラが入り乱れている東京や大阪で地震が起き、数メートルに及ぶ断層のずれが生じたら…、ということ、今回のトルコの地震は日本の地震学者に思い起こさせているわけである。

寺田師いわく、

「自然の暴威を封じ込めたつもりになっていると、どうかした拍子に檻を破った猛獣の大群のように、自然が暴れだして、高樓を倒壊せしめ堤防を崩壊させて人命を危くし財産を滅ぼす。(中略) 災害の運動エネルギーとなるべき位置エネルギーを蓄積させ、いやが上にも災害を大きくするように努力しているものは誰あろう文明人そのものなのである」

濃尾地震が日本の地震研究を推進させるきっかけとなり、今年100年を迎える関東大震災をへて、前述の寺田師と同様に、関東大震災を前に警鐘をならした今村明恒氏らにより地震研究が本格化した。今こそ、当時の緊張感を思い起こすべきだろう。

(令和5年2月)